

はじめに

私が湊かなえに興味を持ったきっかけは、湊のデビュー作である『告白』だった。物語の伏線が巧妙であり、いったいどうなっていくのかと続きが気になる構成であると感じた。事件や事件の解決に物語の要点を置くだけではなく登場人物の心の中を重点的に表現しており、こんなミステリーもあるのかと感動した思い出がある。それから湊の作品が書籍化されるたびに手に取った。その中で、私が本論文で取り扱う『母性』を見つけ興味を持った。

『母性』は「これが書けたら、作家を辞めてもいい。その思いを込めて書き上げました。」と本の帯に添えられ、作者渾身の描き下ろし小説といわれている。物語は、母ルミ子の手記から始まり、娘清佳の回想が交互に繰り返されながら進んでいくという構成になっている。母性とは何かという疑問が物語の大きな主題になっており、様々な家族の関係性、特に「祖母」「母」「娘」の関係に重点を置きながら描かれている。

私がこの作品をとりあげようと思った理由は、作中の「母」と「娘」の関係について興味を持ったからである。この「母」と「娘」の関係は他湊作品にもあちこちに現れている。その中で最も「母」と「娘」の関係が色濃く表れているのが『母性』ではないかと考える。湊の多々ある作品を読んでみてもこのテーマは非常に大切なテーマ性なのではないかと思う。本論文では第一章にて、先行論文や資料のまとめ、第二章にて、母と娘の関係と、他に二つのことを考えていきたいと考えている。一つ目に精神分析から見た本作品の考察である。本作品は精神分析の理論を使うことができる箇所が多々あった。フロイト、ラカンの分析を使ってうまく本作品への接近ができればと考えている。二つ目に、多元内の焦点化による問題である。湊の作品群では全体的に多元内の焦点化という語りの手法を使って物語が表現される。本作品においても同じである。この問題点や多元内の焦点化ならではの良さなどにつ

いてまとめていきたい。最後に、第三章では物語のテーマである母性について調べたことをまとめるとともに、母性の時代設定について、また本作品と『Nのために』に類似性を発見したのでその類似性を対照させながら考えていきたいと思っている。

なお、テキストの引用は、『母性』(二〇一二年 一〇月 新潮社)を使用する。論中では『母性』(●頁)と表記する。

第一章 先行論文・資料のまとめ

湊かなえはもともと広島に住むごく普通の主婦だった。何か形に残るものを作りたいという思いで川柳を懸賞に応募すると見事最優秀賞を受賞する。その後脚本に挑戦し、同じく賞を受賞するが、都内に住んでいなければ脚本家としては厳しいと言われてしまった。脚本への対抗心から「絶対に映像化できないようなものを書く」と決意し、小説を書き始める。そして二〇〇七年、短編「聖職者」で第二九回小説推理新人賞を受賞し、翌年には同作を第一章として受け継いだ『告白』を出版。小説家としてデビューする。その後、『少女』『贖罪』『夜行観覧車』『花の鎖』『母性』など小説を延べ一五作以上出版している。数々の著作は映画化やドラマ化されるなど、今一番人々に求められている作家なのではないか。

このように多くの著書を発表している湊であるがデビューしてからまだ七年程しか経過していないため、湊について書かれた論文は非常に少ない。そのため、批評記事や書評、湊のインタビュー記事などを参考資料として使用していきたいと思う。ここでは、湊の作品に関する四つの論文をまとめていきたい。

まず私がメインテキストとして扱う『母性』に関する、倉本さおりによる書評記事「読むたびに反転する景色の中で問われ続ける『それ』の是非」の内容を見ていきたい(1)。

ここでは、「母の手記」の語り手による唐突な告白の序詞「愛能う限り、娘を大切に育ててきました」は物語上で起こる事件の鍵となる台詞であり、独白の形式で物語を進行させる手法は従来の湊かなえを思わせるが、実際は一線を画しているうえ従来の作品とも、「毒母

モノ」の書籍とも異なる、と指摘されている。毒母モノとは、機能不全家族における母親を表す俗語のことである。本論文で取り扱う『母性』で登場する母ルミ子は、「母親としての役割を放棄している母親」として描かれてはいないのでこう分析されているのであろう。

『母性』における母と娘の関係については、「母」があるべき愛の姿について堂々と語れば語るほど読者には不快の情がわき、あるべき愛を受けられない「娘」の方に寄り添おうとするが、「娘」の叫びはそのまま「母」のものであると述べられている。「母」と「娘」の間に起こった最後の事件の相貌は、互いの回想の中では肝心な部分が微妙に食い違つたままであり、ラストの内容も私たちが望む十分な「答え」をもたらしてはくれないと倉本は述べる。肝心な部分とは、娘の首に母親が手をかけ殺そうとしたかどうかである。母は、盛んに愛する娘を殺そうなどできるはずがないと語るが、娘は首に圧迫感があったと証言する。このように物語中の母娘両者の回想は異なる。倉本は本作品からわかるのは、娘である自覚しか持たぬまま母になることが可能であること、母になろうが女性は一生誰かの娘であり続けることであると述べており、母が娘であり続けたいと思っている事実を飲み込んだ瞬間、「母」と「娘」の景色は地続きで反転すると分析している。読後は不穏な手触りを残したが、再読すると「母」の世界は明度を上げていき「母」と「娘」の景色が反転する中で問われているのは私たちの内に住まう母性の是非なのであろう、と締めくくられている。

本論文では、この指摘からさらに深めて『母性』における「母」と「娘」の関係を重点的に考えていきたいと思つている。

次に、『告白』(2)に関する大西赤人による批評記事「あるべき『志』の決定的な欠落——湊かなえ著『告白』について」を見ていきたいと思う(3)。

大西は、『告白』において物語のよって立つ基盤は、あくまでも第一章『聖職者』にあるという。それは、第一章『聖職者』が、湊のデビュー作であり、この『聖職者』から、次々と話を加えていき、単行本としての『告白』ができあがったこと、物語の繋がりの基となつているのが『聖職者』であることから明らかである。また、大西は伏線のさりげない配置は巧妙であると評している。湊の作品に対してこの伏線の指摘はインタビュー記事などでも

多く取り上げられており、筆力や物語の牽引力があるとの指摘も多々されている。

小説でも映画でもテレビでも、フィクションにおいて、何か表現をするとき作者は『志』を持つて登場人物を生かしても殺してもする。『告白』はそこが決定的に怪しいと大西は述べる。『告白』は現代的キーワードを散りばめた社会的な切り口によって描かれた作品である。「エイズ患者の血液」死への恐怖」というプロットを立てそのイメージを作者として増幅させつづけることによって読者に恐怖を与えるという仕組みは決定的に『志』の低いものに感じられ、この小説が高い評価を得ていることには異議を唱えたいとも述べている。『告白』が「エイズ患者の血液」死への恐怖」というプロットを作者が増幅させて、読者に恐怖を与えるという仕組みであることには私も納得ができた。HIVによって恐怖を増幅させるという物語が『告白』の中心に据えられているテーマであるということは間違いない。しかし、それだけが理由で『志』が低い作品であるというようには断定できないと考える。

これ以外にも大西の論は『告白』が映画化した際にも同じく批評記事として「偏見を拡散させる原作と映画の結構を紛す——『告白』中島哲也監督・脚本湊かなえ原作について」にもまとめられている(4)。

そこでも大西は、『告白』の大前提は要するに「エイズ患者の血液」死の凶器」であるというインパクトであるとし、映画自体のできはなかなかのものであると称賛する声も見受けられるが、論理基盤があくまでも小説『告白』を踏襲している以上、これを映画面に限つてという条件で高く評価することは本来誤つていると考えられると述べている。

さらに大西は『告白』ではHIV感染を「自業自得」と貶める世俗的な見方が何の留保もなく提示され、結果として無批判に追認されており極めて粗雑なものとなっているという。私は、HIVを「自業自得」であるというように貶める世俗的な見方が留保なく提示されているのは、作者湊がHIVに対する人々の認識の現状を読者に提示したいがために、あえてそうしたのだと考える。しかし、留保もなく提示するのはHIVに感染してしまつては方々を踏みにじるものと見なされてしまうので、良いことであると一概には言えない。

当時『告白』はハリウッドからリメイクのオファーを受け、アイルランドや香港などへの

配給も決まっていたようである。世界に『告白』が認知され、多くの人々に読まれるまでになつたということは、読者や映画を見た人々が大西のいうような「志」を感じとり『告白』もしくは湊の作品の良さに気が付いたからであると私は考える。したがって、『告白』は国内の多くの人々には「志」がある作品であると認められたといえると思うのだ。

大西が『告白』を否定的に評価している中で、『告白』には「志」があると分析する飯島美沙都による論文「変化する視点、うつろう真実——湊かなえ『告白』論」を見ていきたい(5)。

ここでは先ほどの大西の論に反論する見解が見られた。「私は「志」とは深いテーマ性だと考えるので、この主張は間違いだと感じた。確かに、大西の指摘通り犯人たちが全くH I Vについて調べないことや、なぜあえて復讐の手段として選んだのかなど疑問には思ったが、だからといって志が低いわけではないと思う。」

飯島は論文の序盤でこのように述べ、また最終的な結論として以下のように述べている。

小説内は多元内の焦点化で書かれているので登場人物たちが言っていることの真偽が確かめられないため一連の話は、娘を亡くし正常な精神を保てなくなった森口の作り話なのではないか。こう考えるとやりすぎな演出、特にH I Vを取り巻く状況の不自然さにも説明がつく。

この見解は少々無理があるのではないか。「血液を飲むことによつてH I Vに感染し得るのかとなれば、ほぼ起り得ない確率であろう。」と大西が述べるように私も『告白』の「血液を飲む」という表現には読んだ当初から疑問を持っていた。また、情報社会において登場人物にH I Vの知識が無いことも非常に不自然である。しかし、作り話であるという指摘は全て違うとも言い切ることができない。森口が独白の中で事件について語る際にはその事件の記憶が森口にとって思い出さなくても辛い記憶であるとするならば、精神的に見ると記憶の修正が多少加えられていても、おかしくはないところでもあるのだ。

次に、飯島の『告白』についての論文の内容について触れていきたいと思う。

飯島は、『告白』は多元内の焦点化により一見謎が解決していくように見えて「真実」を確定することが困難になっていると指摘している。この分析では「真実」の確定が困難であるとされているが、私はそのとき本当に起こった「事実」を確定するのが困難になっているのであると思う。このことについては、本論文でも後に分析していきたいと考えている。

『告白』は命や教師としてのあり方などのテーマも含んでいると飯島は述べる。湊の執筆する作品群には「教師」という登場人物は多く登場する傾向があるキャラクターであるといえる。教師という人物が登場する理由の一つとして湊が教師という職業に就いていた経歴を持つっておりその経験を作中に反映させようとしているためであることが考えられる。

また、飯島は湊かなえの物語の中で明かされるべき謎はひとつではなく、「物語の主軸となる謎」と、「ラストに生まれる謎」の二つがあると分析する。『告白』の場合、主軸になる謎は「なぜ森口の娘は殺されなければならなかったのか」でありラストに生まれる謎は「はたして爆発は本当に起こったのか」である。森口の「なーんてね」という言葉で爆発自体起こったのかどうか微妙になっていると飯島はいう。この湊の作品において二つの謎があるという指摘には私も納得することができた。本論文で取り扱う『母性』も、主軸となるテーマである「母性は本能であるのだろうか」という謎と、物語の最後に起こる事件において「果たして母は娘の首を絞め、殺そうとしたのか」というものがある。二つ目の謎は、先ほども述べたように「事実」と「真実」にも関連する問題であると考えられる。

映画版の『告白』については飯島の分析では、アイドルグループAKB 48のビデオ映像が劇中で使用されていることなどからバトルロワイヤル系の構造が含まれているとされている。

さらに、湊の描く「家族」の話は物語を大きく動かす要素であると分析されている。『告白』の直樹と修哉がそれぞれの母親と意思を通じ合わせることができなかったために起こった悲劇は『夜行観覧車』でどんなことをしても家族は家族であるという結末を経て『母性』の母ルミ子と娘清香によつて浄化されたのではないだろうかということがいえ、いくつかの作品を比較すると湊が描こうとしているのは普通の家族像であるといえると述べられている。

る。私はこのように湊の作品を見る読みでは説明が足りないと考え。浄化されたとは、どのようなことなのであろうかという疑問が残ってしまう。『母性』においての母と娘は、果たしてなんのわだかまりもなく和解できているのであろうか。私は、湊の描く家族関係の問題がこの『母性』で浄化されたとは思えず、むしろ本作品によりさらに複雑化してしまったのではないかと考える。この問題については後に考えていきたいと思っている。

次は渡邊章夫「児童文学の立場から——現代文化に於ける「童心」の行方——」を見ていきたい(6)。この論文は湊の著書『少女』について論じられたものである。

渡邊によれば、現代文学、特にゼロ年代以降の女性文学の作風が大別して二つの傾向を有するという。それは「家族」に基軸を置いた構想が頻出している点と「童心」が鍵語として大きなウエイトを占めているという点である。近年のメジャー作家はそろって十代の主人公を設定し思春期の世界観を描いている。例として川上未映子、湊かなえ、綿矢りさを挙げ、とりわけ綿矢の芥川賞受賞作品『蹴りたい背中』について、非常に狭い世界観の設定による私的で短絡的な生理感情のみを行動原理とする高校生たちのちぐはぐな関係性のみを描出はYA(ヤングアダルト)文学的であると分析する。YA文学の特質とはファンタジー的な想像力による日常から非日常への飛翔性が力強いというものがある。このようなYA文学は近代文学的な価値基準からの移行、すなわち、明確なリアリズムの徹底、登場人物の複雑多岐に絡み合う綿密な心理描写と切迫したプロットの起伏など、作者の精密な計画が欠点なく張り巡らされた濃厚な完成度と整合性を有した、いわゆる既定の純文学路線に対して、現在の文学空間は、ありえない設定や突飛な論理飛躍などリアリズムの稚拙さや緩さを許容範囲としながらも、作品の未完成度を逆手にとって、映画化・ドラマ化など、メディアミックスを加えることで、作者の思惑から逃れた、大衆の望む「キャラ」へと変容・変化してゆくオープンスタイルを特色としていると渡邊は指摘する。換言すれば、現代文学は、作者のプライベートな内面世界を等質そのままに写すものではなく、むしろ、オンタイムに進行する同時代の社会感情や大衆心理を過度のデフォルメ感を有しながらも映し出す鏡像としての役回りをしており、さらに言うなら、時代や社会が心に溜める、日常生活の中では隠された不

可視の病弊や負のエネルギーを象徴的に可視化して晒し出しているとし、このような表現を「内視鏡」のような開示表現であるのだと渡邊は分析している。また、現代社会が希薄な人間関係とコミュニケーション不全の直情型の様相を示している事実を我々は作品によって再認識させられるのであるとも述べている。

ここで、湊かなえの『少女』である。湊のようなメジャー作家でも十代の少年少女を主人公やキーパーソンとして配置させる手法を取るとされているが、構造においては二人の登場人物の視座に立った独自のストーリーが螺旋状に展開され、最終的には両者が整合的に落着くという物語の構造を湊ならではのからくりであると評価している。また、現代社会特有の惰性的で没個性的に過ごすフラット空間に埋没したアイデンティティクライシスつまり、「自分は何なのか」といった自己同一性の喪失を背景にそこから脱却して他人より優れている唯一の自己を獲得する手段として「死体を見る」という異質な発想が導き出されていると述べる。既に多くの社会学者が分析するように、誕生と臨終が自宅から病院に隔離されている。その結果、人生の始源と終焉という最も劇的な生の部分を排除することで地ならしされたフラットな日常を超え、自己特権化を生み出すインパクトとしての「死体への接近」であるが、「死体を見る」「人間の死の間際を見る」という体験の有無が、アイデンティティクライシスからの回避と、他者との差別化による選民意識を担保しているとの着想はあまりにも安易であると指摘する。現代小説がリアリズムにこだわらず、設定や筋立ての甘さの非難をものもしない風潮は湊かなえのようなメジャー作家でさえ例に漏れないとしている。しかし、こうした現代的な傾向をこそ、作家個別の考えから導き出された私的な声とみなすのではなく、同時代を生きる大衆の要請を受けたいわば「時代の依り代」としての抽象表現と受け止めるべきではないかと述べている。かつての思想の傾向に支えられてきた文芸性を持つ近代文学的な価値の基準からは大きく離れた、あえて合理性や知的構成を避け赤裸々な心性を露出するような手法は、メジャー作家から、同人誌などで窺われる裾野のアマチュア小説にまで一貫して認められるとして渡邊は締めくくっている。

これらの指摘の中で私は、現代文学はオンタイムに進行する同時代の社会感情や大衆心理

を映し出す鏡像としての役回りをしており、さらに、時代や社会が心に溜める、日常生活の中では隠された不可視の病弊や負のエネルギーを可視化して晒し出しているという部分に共感するとともに、湊の作品においてこの鏡像としての機能があるということを改めて感じた。湊はその時代の特徴、小文字の歴史を代弁しているという側面があることは具体的に「時代設定」として第三章において論じていきたいと思っている。

第二章 作品論

改めて『母性』について少し紹介したい。「これが書けたら、作家を辞めてもいい、その思いを込めて書上げました。」と湊がいうように作者入魂の描き下ろし長編小説である。湊はただならぬ「覚悟」を表すためにそのような「作家を辞めてもいい」という言葉を使ったのだという。湊は自ら「こういう話を書きたいです」と申し出たのは『贖罪』(7)と『母性』の二作だけであるという。本作品においては初めてお願いの手紙まで書き、担当者へ提出するほど思い入れが詰まった作品であるといえる。女性には「母」と「娘」の二種類いるのではないかと考えた湊は母になることができる女性と、娘であり続けたいと願う女性との二種類つまり母性を自然に持っているような女性とどうやっても手に入れられない女性がいるという結論に達する。結婚して子どもができれば自然に母性が芽生える、女性だったら誰でも母性を持っていると一般には考えられているが果たして母性は本当に存在しているのかという疑問からこの作品はなる。湊は直感的に、それは違うと思ったと述べる。いつまでも娘であり続けたい、とどまり続けたいと思っている女性から生まれた子どもはどうやって成長していくのか。それが本作品の物語中の根幹をなしていると考えられる。母性が無いとされる母親、親や周囲の顔色を窺い愛情を求め続ける娘、嫁姑問題、家族の関係性。現代の社会に起こっている問題を様々に取り入れながら進む本作品は非常に読み応えがあり、二〇一三年五月には第二六回山本周五郎賞の候補作にもなっている。

*精神分析

湊かなえといえは、「母と子」を描くのが巧みである、と言われることが多い。デビュー作『告白』から『贖罪』『夜行観覧車』などの物語に代表されるように、湊は様々な「母と子」の姿を描いてきた。『母性』もこの例に漏れない作品であると考ええる。しかし、本人は雑誌のインタビューでその「母と子」の関係性を描いた作品が多いことを指摘された際にこう述べている(8)。

私の作品って、わりと親子関係、とりわけ「母と娘」を描いているというイメージを持たれている方が多いんですが、実は自分ではまったく意図していませんでした。それほど多くの人にとって「親子」というテーマは響くものなら、一度正面から取り組みたいと思ったのです。

この文章から、湊は『母性』を執筆する前の作品まで「母と娘」の関係性について意識してこなかったということが分かり、本作品は「母と娘」の物語を意図的に文章に書き起こした物語ということになる。このことから、本作品は作者が今までとは心持ちを変えて挑んだ作品であるという点でも意味深い作品であるといえる。

ここで、作者湊のインタビューの受け答えについて特に気になる部分があることに注目したい。インタビューは「母と子」の関係性を指摘しているのに対し、湊は「母と娘」や「親子」という言葉にこだわって使っている。したがってこの部分は、はたから見れば「母と子」という言葉を意図的に避けているようにとれる内容であるといえる。これを精神的に見ると、フロイトのいう抑圧が働いているといえるのではないか。抑圧とは、意識すること、気づくこと、注意を向けることが不快であったり苦痛や恥、嫌悪などの感情を持つたりする。よるような内容を意識すまい、気づくまいとする無意識的な働きのことである。無意識は、人間の精神生活にあらゆる影響を与えているにもかかわらずそれ自体は本人が無意識の内容を意識させようとしても容易に意識化され得ない。このように湊には自らの記憶の中にあ

る何らかの注意を向けることが不快であったり恥や嫌悪を伴ったりする出来事を無意識の領域に沈め込み、それを言葉にすることつまり意識の領域へと昇らせることをためらっているのだということが出来る。

* 鏡像段階

本作品には鏡像段階的な描写が見られるところが多々ある。鏡像段階とは、幼児が、鏡に映った自己の身体の統一イメージを獲得していく過程のことである。未熟な幼児は自分の身体のイメージが断片的でばらばらである。人間は同じようなパーツを持った別の人間もしくは鏡を見て自らとの類似性を見つけ自分の全体像を類推していく。つまり、想像界から象徴界への参入である。ラカンが人間の認識の世界を「現実界」「想像界」「象徴界」とした。現実界は幼児の感覚が未分化の状態をいい、言語の境界の外側にある。想像界は鏡を見て自己を発見して分裂した感覚を統合する段階をいい、イメージや空想の領域である。象徴界は言語によって構成される世界である。このように自我の成立を説明するためにラカンが定式化した概念が鏡像段階である。この鏡像段階にはメタファーとしての意味合いもあり、幼児に対して最も身近にいる母親を鏡にすることによって自分がどのような存在であるかを認識する過程も指す。ラカンによれば、人間は他者との関係によって「自分」が形成されるという。生まれたときから「自分」であるのではなく、私たちが「自分」だと思っているのは、本当は他者によって作られたとされる作り物なのである。

本作品においては主として「娘の回想」に「鏡」という単語が多く登場する。何も考えずに読むと、以下引用部分で母は娘と正面から向きあっていないこと、鏡は母と娘をつなぐものとしての機能があると読めるであろう。

母の風呂は短い。なのに、化粧水を塗ったり、パックをしたり、肌の手入れをするのには、風呂の三倍ほどの時間をかけていた。鏡台に向かう母の後から、鏡に映る母の

顔を見ながら学校でのことを報告するのも、毎晩の習慣だった。

『母性』(一一二頁)

これは火事で燃えて無くなってしまった「高台の家」で清佳が母に報告していた時のことを思い出した場面である。この場面は母が娘に鏡越しでしか向き合わず、正面から接しないということ象徴しながらも、「鏡台に向かう母の後から、鏡に映る母の顔を見ながら学校でのことを報告するの」という部分より、鏡に映る母の顔を見るという行為が鏡像段階的な表現であるといえるとともに、この部分は母が娘の報告を聞いてあげているため、ここだけを見るならば鏡像段階が成功しているということがいえる。しかし、私はこの物語の全体を通してみると鏡像段階が成功していないのではないかと考察する。「娘の回想」にてルミ子は、以下のようにして自分の娘を鏡からも遠ざける。

学校での生活は毎日単調で、それほど語ることはないけれど、たまにおもしろいことがあると、つい夢中になって話してしまう。すると母は、最初は「あら、そう」と優しく鏡越しに微笑んでくれるのに、その笑顔が嬉しくてさらにとりとめのない話をしていくと、ふっと冷たい表情になり、「もう、いいでしょ。あっちにいきなさい」とわたしを鏡に映らないところまで追い払った。

『母性』(一一二頁)

この描写からわかるように、清佳は鏡越しにルミ子が見える場所から遠ざけられてしまっている。母を見ることが物理的に不可能になってしまう。こうなると母親を感じ取ることも、母親に近づくことも許されない状況になり、鏡像段階が成功しているとはいえない状況であると考えられる。またこの母娘関係の中で、高台の家ではあった母が娘の手にハンドクリームを塗るといふ唯一の触れ合いの描写が無くなってしまっている。普通、親子ならば日常的にほとんどあるべき触れ合うという行為が無いということは次の描写から認識することが可能である。

屋敷の離れでも、顔の手入れが終わると、母は桃の香りのハンドクリームを取り出すけれど、塗ってあげようか、とこちらを向いてくれることはなかった。塗って、こちらから手を出したことはない。人から平気な顔をしてものをもらおうような子になってほしくないということは、こちらからねだるなという意味だ。それは、きっと母に対してもそうなのだろうと、子ども心に解釈していた。

『母性』(一二二頁)

親子三人が屋敷に移り住んだときを境に母と娘の触れ合いの交流は無くなってしまっている。娘が母を直接見て触れていくという機会が全くなってしまうことと同時に鏡にも関連させて触れ合いの描写がされていることから娘の鏡像段階が遅れてしまっている、もしくは完全に成功しているとはいえないことが強調されるのではないかと考える。これらが、娘はいつまでも母の気持ちを察することができず両者のすれ違いが生まれてしまうという原因なのであると考えられる。

* 欲望の対象

「お姉ちゃん、協力してね」母はわたしにそう言うてくれた。お姉ちゃん。多分、あのときが一番、母がわたしを必要としてくれ、わたしという存在を受け入れてくれていたのではないだろうか。

『母性』(一六四頁)

作品内では、ルミ子に二人目の子どもができるという挿話がある。二人目の子どもは桜の木にまつわる「桜」とルミ子により名づけられ、ルミ子にとっては母の分身を思わせるような存在であり、また家族にとつても非常に大切な存在であるという立ち位置におかれる。ルミ子の第二子の妊娠により清佳は新しく「お姉ちゃん」という名前を持つことになる。清佳

は母に「お姉ちゃん」と呼ばれること、その言葉の記号に、存在意義を見出し、しかし、第二子は、清佳の従弟である英紀が日々休まることを許されず容体が悪くなっているルミ子を無理やり散歩に連れ出し、さらには突き飛ばして転ばせてしまったため生まれてくることができず亡くなってしまふ。家族がこの新しい生命の誕生で家族の再生を目指していたのにもかかわらずルミ子の流産によりその夢は口惜しくも断たれる。作中で清佳は自分の存在意義を母に認めてもらうことにあるとしている。唯一、母に与えられた「お姉ちゃん」という記号的な役割まで断たれてしまった清佳は自分を母に認めてもらえない存在なのだとして強く認識し、自分の存在意義が何なのかわからなくなる。清佳がそれを模索している描写が次の引用部である。

わたしを褒めてくれる人などどこにもいない。わたしの存在を認めてくれる人などどこにもいない。いったい、わたしはどうしてここにいるのだろうか。(中略)母に嫌われる自分が嫌いだった。自分の存在をどうすれば受け入れられるのだろうか、と考えた。母に認めてもらえないのなら、自分だけでも、自分を認めてあげなければならぬ。自分で自分を好きになる。好きな人ようになる。母のようになれば、自分を好きになれるだろうか。いずれ、母もわたしのことを好きになってくれるだろうか。母に愛されたい。何を考えていても、辿り着く先はいつも同じだった。

『母性』(二二二頁)

この部分から、清佳は自分探しの終着であるアイデンティティ確立を母に認めてもらうこと、母に愛されるということとし、それは桜が亡くなったことと同時に喪失してしまっていることがいえるであろう。ここで、ラカンが提唱する対象 α の理論を思い出したい。対象 α とは、その先に求めるものの代替としてある。まず、対象 α を「自己の存在を保証するもの」とする。そうすると、作品内で清佳にとつての自己の存在を保証してくれる対象 α は桜であるということが出来る。叔母の憲子や従弟の英紀から母を守ろうとした行動により「桜を手

に入れたい」ことは対象 ρ を手に入れたいという情熱につながり、清佳を動かしていることが分かる。清佳の場合、その対象 ρ の先にあるもの、本当の欲望は母の愛である。

清佳は常に母からの愛に飢えている。それは決して満たされない欲望である。清佳を根本的に動かしていたのは、幻想のような対象 ρ でなく、意識的にせよ、無意識的にせよ、「愛されたい」という心情であった。一時は母に「お姉ちゃん」としての存在意義を見出してもらえたが、それを失う。以上述べたことから清佳が存在意義を得て失うという物語を読むことができる。

また、欲望は自ら創造するものではなく他者の欲望から主体に植えつけられるものであるともいう。この「愛されたい」という欲望が身近な他者、母の欲望であるとすればその欲望はそのままルミ子のものであるともいえるのではないか。

「娘の回想」で、ルミ子は清佳に暴力を振るっていることが読み取れる。

無力さを浦感した晩は、夜中、眠っていると、母の「なんで、なんでなの……」という涙声と一緒に、背中や脇腹に拳を固めた強い衝撃が降ってきた。痛みにも声をあげて泣きたかったけれど、これは祖母のせいなのだ、祖母から母を守りきれなかったわたしのせいなのだ、自分が悪いのだ、と歯をくいしばって寝た振りをしていた。

『母性』(一一九頁)

家庭内の暴力は母親が子どもの存在意義を認めてあげられないから起こるものであるという分析がある。それは以下の通りである(9)。

母と言う存在に受け止められた子どもは自分自身の存在を感覚することができません。それはやがて確信に変わります。それが、子どもの存在感覚「ある」なのです。「ある」とは、いまここに・自分は・自分として・あるという自己同一性の感覚のことです。むしろ安心して・安全・安定的にといいことはいうまでもありません。虐待はあらかじめ

申しますと、このような子どもの「ある」をつくることのできない家族の状況、子どもの「ある」を剝奪してしまう家族の状況を語っているのです。

作品内では、ルミ子は自分の母を求めすぎており清佳の存在を認めていない。認めていずれば、先ほども述べたように「お姉ちゃん」としてのみである。作中の状況はこの指摘に非常によくあてはまると考えられる。また次の指摘を見てもらいたい(10)。

親の子どもへの憎しみは、子どもに自分の欲求表出の受け止めを求めたのに子どもが応えてくれないということから生じるのです。このとき親(母親)もまた子どもなのです。家族に大人(受け止める力を持った存在を大人と呼ぶことができます)がないのです。

こういう家族においては、母親の顔は子どもだけで変わることになります。

とくに「親の子どもへの憎しみは、子どもに自分の欲求表出の受け止めを求めたのに子どもが応えてくれないということから生じるのです」という部分は本作品の母娘の関係を的確に表している表現であると考えられる。また、先ほどの文章の続きを見たい。暴力を振るう母親も愛を受け止めてもらっていないという分析である(11)。

こういう場合、母親もまた乳幼児期に愛情欲求を受け止めてもらった体験があまりなかったのではないかと推測したくなります。母親が不在となったり欠如したりする状況があったのではないかと推測したくなります。だから母親は乳児をまねにして、母になるよりも自分もまた乳児になって相手―乳児―に欲求表出の受け止めを求めます。だが求めても得られないはずがない。それゆえ憎む、そんな構図が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

この通り、私はルミ子も母親に愛情を受け止めてもらえなかったのではないかと考える。ルミ子の母親は清佳にとってはおばあちゃんである。作中ではおばあちゃんのこととはみんな

が大好きで、おばあちゃんがいるだけで皆が笑顔になるというように笑顔の象徴的存在としても描かれている。また、読者もおばあちゃんは皆を包み込んでくれる母なる存在として読むであろう。したがっておばあちゃんにはルミ子と違ってプラスなイメージを感じられることが多い。しかも、ルミ子に対しての接し方もしつかりと母親らしく、子どもと触れ合うことをしないルミ子とは対照的な母親である。おそらく、おばあちゃんは母性を持った母親像として作中では描かれていると感じられる。しかし、ルミ子が妊娠した際にしたなぐさめの言葉に少し疑問が残る。

「怖がらなくてもいいの。お母さんは、自分が生まれてきて本当によかったと思ってる。あなたを産んだときもそう思ったけど、今はその二倍、喜びを感じているの。だって、自分の命がより未来に繋がるのがわかったんですもの。(中略) 歴史の中に点ではなく線で存在できる、ということなのよ。こんなに素敵で幸せなことはないでしょう」

『母性』(二三頁)

歴史の中に線として存在するということをおばあちゃんは一貫して望んでいる。高台の家が燃えてしまった際ルミ子に清佳をたすけなさいという理由も歴史のなかに線として存在したいからというものであった。この「歴史の中に線として存在したい」ということのみを考えると、別に子どもがルミ子でなくてはならない理由はなく、代替できるということになる。たまたまルミ子が自分の娘だった、だから愛したということだけが理由でもおかしくはないのである。また、物語冒頭でルミ子は母に対し「なぜ」という問いをしていたと語る。

答えを知っていてなお、相手の口から直接聞き、確認したいために、わざと訊いているのです。あなたが、がんばったからよ。あなたが、好きだからよ。あなたが、愛しているからよ。耳に心地よい、心の中を温かいもので満たしてくれる言葉を聞きたくて、幼い頃から私は母に何度も「なぜ」を繰り返してきました。母の愛情を、私がこの世の誰

よりも愛されていることを、確認するように。母の答えはいつも、私が予測していたものか、それ以上のもので、決して私を裏切ることはありませんでした。決して――。

『母性』(八頁)

もし、本当に愛されていることが実感としてあれば、「なぜ」などと、たとえわざとでも聞きたくなるものではないと考える。言葉にしてもらわなくては分からない時になぜと言う言葉は使われる。ここから、本当はルミ子の母はルミ子を特別な存在とは認識しているものの自発的にはルミ子への愛情を口にしていなかったのではないかと考えることができ、皆の優しいおばあちゃんも、このようにある一面を見ると本当に娘を愛していたのが微妙になっっているということがいえ、ここから作品の読み替えが可能になる。

*多元内の焦点化について

本作品では、一章ずつに「母性について」、「母の手記」、「娘の回想」という三種類の項目があり、項目ごとにそれぞれ違う立場にある語り手が自身の心の内を述べていくという形式がとられている。このように複数の語り手が自らの心情を述べていく形式は多元内の焦点化と呼ばれる語りの手法である。本作品ではこの三つの視点が重なり合うことによって読者が事の真相や物語全体に少しずつ近づけるようになっていく。多元内の焦点化による湊の語りの手法は事件の真実が明確にならないという理由から、作者の短所であると前章においての先行論文では指摘されている。しかし、本作品においては最後に明らかにされる事件(娘が自殺を謀った事件)の真相が最重要視される訳ではなく、登場人物の心情や感情を描写することに重点が置かれている。三種類の視点が重なり合うことによって母であるルミ子と娘である清佳の心情や、両者の気持ちのすれ違いが確かに読者に伝わっていく。実際に起こった事件、本作品でいえば先ほども述べたように娘が自殺を謀った事件であるが、これは私たちがいるとされる象徴界の中にある「言語」をもってのみ描き出すことができる。『母性』をはじめ湊の作品群全体を通していえることであるが、あらゆる人物の目線や心情の方向か

ら事件の証言がなされるのが作品の特徴である。事件を表現するためによりの確かな言葉を探し、より多くの言葉を重ねていくことよって登場人物一人一人が少しずつ読者に現実に起こった事件へと近づけていくこととする試みは、言語活動のみで物語を語る性質をもつ小説ならではの表現方法であるといえる。私たちが用いる「言語」では本当に起こった現実を語ることは不可能である。しかし、また私たちは言語でしか現実を語るができない。このような物語の描かれ方によって言語による「現実」の特定の不可能さを作品により読み取ることが可能である。このため、本作品また他湊作品においても多元内の焦点化により物語を語る手法が作者の長所として活かしているのではないかと考えられると思うのだ。

多元内の焦点化による物語の謎の問題に関連して、先行論文で述べられていた湊の作品の中で明かされるべき謎はひとつではなく、「物語の軸となる謎」と、「ラストに生まれる謎」の二つがあるということについてももう少しこだわって考察してみたい。本作品において物語の軸となる謎はもちろん「果たして母性は本能であるのだろうか」という謎であり、「ラストに生まれる謎」は清佳が自殺をはかる事件で「ルミ子は、清佳を殺そうとしたのかどうか」というものである。「果たして母性とは本能であるのか」という謎はひとまず置いておき、後三章にて考えることとする。物語のクライマックスの謎について私は、ルミ子は清佳の首を絞めてしまったという説が濃厚なのではないかと考える。その理由のひとつとして母の告白に娘の清佳を抱きしめるために「両手をまっすぐ伸ばしました。『母性』(二三〇頁)とあるところから、抱きしめるために伸ばす手が「まっすぐ」であるというのはいささおかしいのではないかと感じたという経緯がある。まっすぐ伸ばされた手は次の清佳の証言のように首元へいくのではないか。

母が一人で抱えてきた悲しみを、これからは二人で共有していくことになるのだ、と喜びに似た感情が湧き上がったと同時に、首に強い圧力を感じた。母の節くれだつた指はわたしの首にからみつつき、指紋の型さえ感じてしまう厚くざらざらとした指先が、わたしの喉に少しずつ食い込んでいった。

『母性』(二五七頁)

以上の部分から清佳が首元への圧迫感があったと証言していることがわかる。

また「娘の回想」と「母性について」では、ルミ子の手記や言動に頻出する言葉「愛能う限り」は愛していないがゆえに出てしまう言葉であるという清佳による物語中での考察がある。この考察からもルミ子の証言には多分に胡散臭さが漂うということがいえ、ルミ子は正確なことを証言しているとは言い難いのであるということがわかる。ここでは母と娘以外の第三者的存在である国語教師もこの清佳の考察に賛同しているためこの清佳の考察は極めて整合性が高いということが可能であろう。

以上のことからルミ子は自分の身に起きたことを思い出しながら話していることと決意をしているものの、ルミ子が記す手記の言葉はだんだんと当人の都合が良いように修正が加えられる、都合が良いように過去に起こった出来事を思いのままに再構成しながら記されているのだといえる。人間は自らが思い出したくない記憶を正確には思い出すことは難しい。ルミ子に限っては思い出さなければならぬ記憶が自身にとって、今まで生きてきた中で最も辛く苦しいとされる自分の母の死、またそれに直接的に関わっている娘との間に起こった出来事であるので尚更そうであるといえる。したがって、もし思い出せたのだとしてもその記憶は正確なものではなくルミ子が意図せず無意識にあることが加えられ、再構成された記憶しか言葉にならないということがいえるのである。ルミ子は作品内でこう語っている。

でも、神父様。私はもしも願いが一つ叶うとしても、あの高台の家での暮らしに戻りたいとは思わないのです。もっと昔、父と母と三人で暮らした、あの人たちの娘でいられた日々に戻りたいのです。

『母性』(二三五頁)

自分の娘が生死をさまよっている状態の中でさえも母を想う台詞が先行して出てきてし

まうルミ子を見ると、今は亡き母の娘とせずとあり続けたいと強く願っていると考えることができる。そのように母の娘であり続けたいと思っているからこそ、自分の娘には愛情が向かず、以下のようにして愛情の取り繕いを行い続けるのである。

いいえ、たったひとつ願いが叶うなら……。

私の愛する娘の意識が一日でも早く戻りますように、と願います。大切な母が命をかけて守ったその命が、輝きを取り戻し、美しく咲き誇りますように、と。

『母性』(二三五頁)

ルミ子は「いいえ」と本音である前言を撤回し、以上のように述べる。このようにルミ子の手記は安定しない。

事件の真実とは実際、それぞれの人物の中のみにあるものであり、ここでも母ルミ子と娘清佳が異なった真実を語るのはむしろ当たり前のことではないかと考える。それぞれの人物ごとに違う真実を小説で見せることに湊の作品の良さがあるのだ。

第三章 作家論

* 母性とは何か

母性を本能であると考えてよいのであろうか。本作品のタイトルにもなっているこのテーマがこの作品において重要な意味を持っていることは間違いないと考える。「母性」とはずっと昔から言われている「女性」もしくは、「母親」としての性質であるという誤解を受けている場合が少なくない。「母性」という言葉は「母性本能がくすぐられる」、「母性的だね」など日常的にも頻繁に使われる言葉でもある。しかし、「母性」とは昔ながらにしてある言葉ではなく、近代になって生まれた考え方なのである。まずは女性を取り巻く状況、近代における母性について調べたことをまとめていきながら、母性について考えを深めたいと思う。

母性に関する議論には、ジェンダーに関する議論と同様に大きく分けると二つの立場がある。田間泰子によれば、「母性というものは女性の身体に備わっている（もしくは潜在的に備わっていて、その発現をまつている）」という本質的立場と、それは身体のある方も含めて社会的に構築されるのだという社会構築主義である。¹¹と述べていることから、それは明らかである。『母性』の作品中では「母性」は本能ではなく後天的に備わるのであると提言する社会構築主義的立場のキャラクター（教師である清佳）が登場してくることから、本論文でも母性を社会構築主義の立場から母性とは何なのかについて考察して見ていきたい。

女性が「子を産む」ということの重要性を考える時、私たちはしばしば、その営みの基本的な性質である子孫を残すということの連続性を思い浮かべる。人間の歴史の最初から現代に至るまで、女性は子どもを産み、育ててきた。人間の歴史が続いてきたのは、女性のその営みがあったからであり、その営みは全ての過程において、女性たちの喜びや、苦しみや嘆きを巻き込んできた。女性に要求される「子どもを産み育てる」という労働は社会において、「性役割」の中でも特に中心的な位置づけを与えられている。「性役割」は、第二派フェミニズムにおけるキーワードであった。第二派フェミニズムとは近代社会の男性中心主義自体を問い直す運動のことであり、そこで「性役割」という概念が提起されたのは、女性として生まれた瞬間に生じる宿命を打破するためであった。女性として生まれた瞬間に生じる宿命、すなわち「生理学的宿命論」が主として論拠としていたのが、先ほども述べたような女性の「妊娠」「出産」「哺乳」等の子どもを産み育てることに関わる営みであった。これらの営みは、従来女性だけが持つ「母性」という「自然的性質」として位置づけられていた。しかも、その「自然的性質」としての「母性」が女性の「本質」であり、女性は妊娠・出産期だけではなく全生涯にわたって「母性」に縛られ、規定されると考えられた。またこの女性の「母性」を根拠として子どもにとつて、もっとも良い養育環境とは「母親の手で育てられること」とであるとされ、また子どもという存在そのものの中に「本質的に母親を求めめる」傾向が備わっているとも考えられてきた。「母親の手で育てられること」と関連するものとして「三歳児神話」がある。三歳児神話とは、子どもにとつて「三歳までは母の手で」育て

ることが良いとされる社会的通念である。この通念は一九六一年に開始された「三歳児検診」とその背景にある池田内閣の「人づくり政策」によってつくられた側面があると言われている。また当時の厚生省児童局長は、「事情の許す限り母親より職場から家庭へ本拠を戻してください」と文章に書き記し、母親を積極的に家庭の中へと囲い込んでいった。行政責任者のこのような考えのもとで「三歳児検診」が導入されていったのだと考えられる。このような厚生省の政策は、世論作りのためのマスコミを利用した宣伝や広告、広報活動、といったプロパガンダとしてもなされ、そこでも「母性」という言葉を多用することによって、「女性」母性」という観念を定着させるといふ政治的な思惑が見事なまでに成功していったのである。このように、政治的な思惑による指導という社会的経緯があり、「女性だけが母性を持つ以上、女性が子育てをするのが自然であり当然のことなのだ」といった認識が人々に何の疑問もなく、まかり通っていくに至ったのである。したがって、本質主義的な「母性」は制度として完成していった、ということが可能であろう。

日本のフェミニズムにおいては、「自然としての母性」、すなわち女性が「母親としての自然的な性質」を持っておりその性質には「子どもへの本能的・先天的な愛情」などが含まれている等の観念を解体するために動いている。これまで主として二つの方向で議論を展開してきたようであるが、それについては江原由美子の論文に詳しい説明が述べられている¹²。江原によれば、まず一つ目として、「母性」という言葉に着眼し、誰がどのような社会背景のもとで、どんな事柄に対しどんなことを言うためにその言葉を使用したのか、あるいはその言葉をそのように使用することがどのような効果を生んできたのか等を、考察することであるという。「自然的」「先天的」「本能的」「生理学的」事実は、それ自体として存在しているのではなく、それらは、ある事柄を「自然的」「先天的」等と規定する社会的実践（言説）によって、そうした「事実」として「構成」されるのである。ある事柄を「自然的」「先天的」等と規定する社会的実践は、その時代における様々な政治的社会背景に影響を受けている。例えば、「母性」を「生理学的」な事実として扱うことは、妊娠や出産を医療制度の管轄下に置くことと密接に関わっている。またこのような「自然的」「先天的」「生理学的」

な意味の付与された「母性」という言葉を、妊娠や出産に関する事柄を超えて女性のアイデンティティそのものを意味する言葉として使用することは、性別役割分業を「自然」のものとして正当化する効果を持つのだと述べられている。そして、第二の方向は女性の避妊・妊娠・出産・中絶・子育て等の具体的な営みに関して、それらの活動が、どのように変化してきたのか等を明らかにすることである。「普遍的・自然的」なものとして位置づけられてきたそれらの営みが、それぞれの女性の社会的状況や医療技術や法などの社会環境変化によって大きく変わりうることを示すことで、「母性の自然性」という観念を解体可能にするという。

本論文のメインテキストである『母性』の作品中には章ごとに「母性とは何か」について中心的に考察を行っている「母性について」という項目があり、そこでは前章でも述べたとおり、教師である清佳が自身に起こったことを思い返しながらひたすら母性について考えを巡らせている。清佳が母性は本来母親に必ずしも存在するとはいえないのではないかと、社会が構築したものではないかと思っていることについては、以下から説明していきたいと思う。第二章「母性について」で清佳はふと「母性とは何なのだろう。」という問題提起をし、すぐに国語辞典を引いて母性の意味を調べようとする。

——女性が、自分の産んだ子を守り育てようとする、母親としての本能的性質。

『母性』（五二頁）

これがこの作品中で一般的に認識されている母性の定義である。これは先ほども述べた本質主義的な考え方の例であり、世間一般に蔓延している考え方である。しかし、この定義とは異なり、清佳は母性を人間の本来持っている性質では無い、社会構築されたものだと述べている。それを窺い知ることができる箇所は以下の通りである。

食事もろくに与えず、子どもから金を奪ってパチンコに通う女にも、この性質が備わ

っているのだろうか。世間一般には、女、メスには、母性が備わっているのが当然のよ
うな扱いをされているが、果たして本当にそうなのだろうか。

生まれつき、とりあえず備わっているが、環境により、進化したり退化したりして
いくものなのだろうか。

そうではなく、母性など本来は存在せず、女を家庭に縛り付けるために、男が勝手に
作り出し、神聖化させたまやかしの性質を表す言葉にすぎないのではないか。

『母性』(五二頁)

この部分から、清佳は母性を本能としてとらえることに否定的な立場であることを読み取
ることができるであろう。

ここで、「母性本能」について先ほどに続いてさらに詳しくみておきたい。「本能」とは遺
伝子のレベルにおいて前もって設定され、調整された行動パターンのことである。例えば、
動物の例でいうとミツバチのダンスは特に学習をしないでもされる本能的な行動であるこ
とが一般的に知られている。このように生まれながらにして持っている行動のことを「本能
行動」という。特に人間の場合では日常、頻繁に使われる本能の一つとして「母性本能」が
ある。しかし、子を産み育てようとする母親としての性質は、本能行動であるとはいえない。

また、先ほどの清佳の主張はそのまま作者のものである。その根拠が、『母性』のインタ
ビュー記事にある。作品中に「本来は存在せず、女を家庭に縛りつけるために、男が勝手に
作り出し、神聖化させたまやかしの性質を表す言葉にすぎないのではないか。」といった言
葉が出てくることを指摘された湊はこう答えている(13)。

物語の中に挟んだ「母性論」には私の疑問やその時点での考えがそのまま反映されて
います。(笑)。よく「女として生まれたからには、子どもを育てるものですよ」「母性
が備わっている女性は偉大です」と言われるたびに「ええ？」と思うんですよね。そう
やって、結局子育てを女性に押し付けて、「がんばれよ」とプレッシャーをかけてるだ

けじゃないでしょうか。

女性だからって、みんな母性を持っているわけではないですし、母性がないのも悪い
ことではないと思います。むしろ、「ない」ことを認められず、あるように取り繕おう
とすると、母親も子どももしんどくなるのでしょう。

湊の母性観はここからわかると思う。ここでは『母性』についてのことが述べられている
が、湊は本作品に限って「母性が本能はない」のだということを作品にのせて伝えているわ
けではなく、他作品においても母親は必ずしも母性を持たないことを伝えていると私は考え
る。本作品のルミ子のような「母性を持たない母親像」は二〇一〇年一月東京創元社より単
行本が刊行された『Nのために』にも登場する。加えてこの『Nのために』のいたるところ
にあるキーワードが『母性』とも共通し関連することを発見したがここでは母親像の比較の
みを行いたいと考える。

『Nのために』に登場する人物、西崎真人の幼少時代に起こったことを綴った小説内小説
「灼熱バード」に登場する母親が母性を持たない母親像として登場する。

西崎の母親は西崎を愛していると言いなながら暴力を振るう(14)。

丸首シャツの首もとを後ろから力いっぱい引つ張られる。息苦しさにむせながら両手で
シャツの首元に手をかけた子どもは、そのままの姿勢でミルクの飛び散った床の上に蹴
り転がされた。女は丸く身を縮めた子どもの背中や脇腹を、サッカーボールのように蹴
り始める。

暴力は『Nのために』においても母の母性がないことを裏付けるような行動として描写さ
れている。やはりこのイメージは『母性』と共通するものであると考えられる。

『Nのために』では物語の主要となる人物である杉下希美の母親も「母性の押しつけ」の
ような言動、行動をする描写がある(15)。

「わからないわ、わからない。希美ちゃんだってわかってきてないじゃない。ママはきれいにしておかきや、晋さんが迎えに来てくれたとき、困るのよ。ママ、あなたたちのために一緒に家を出てあげたのに、どうしてこんなひどいことするの？」

「あなたたちのために」というところから自分の考えの押しつけを読むことができると思う。また、この杉下の母親は外見をきれいに着飾りたいとする。ルミ子も外見をきれいに飾っている女性であると描写されていたので、このイメージも共通していると考えられるのではないかと思う。

このように『Nのために』も、母性が欠如した母親が出てくる。子どもに対して虐待をする母親、愛を言葉にするが本当は主体に愛など存在していないという設定の母親。これらの母親像から、湊は「母性は本能ではない」ということを他作品においても読者に伝えているのであるといえる。

* 時代設定

第二章「母性について」で清佳は、生徒の母親について子どもを必要以上にかわいがる「親バカ」や学校の授業料が払えない親などの「バカ親」について考察している。

高校生の母親、と一括りにするのは難しく、電話一本を例に挙げても、体調不良による欠席の連絡といったようなのはずれなことまで、母親から語られる用件は様々だ。熱が出たと伝えればいいだけのものを、昨日の夕方の段階では何度だった、食欲がない、夜はうなされていた、など小児科の医師に伝えるかのようにこまかく病状を説明する母親。あの子はからだ弱くて、と涙声で訴えられると、さて、自分は誰の親と電話をしているのか、と頭の中で考え直すこともしばしばである。(中略)こういった母親たちは、鬱陶しいが嫌悪感を抱いたことはない。子どもを必要以上にかわいがる親バカっぷりに

あきれることはあっても、否定をする気にはなれない。

『母性』(五〇頁)

自らが母親に愛されていなかったということが実感としてあったため、清佳は自分の生徒の母親たちが子どもに対して行き過ぎた愛情を表現することにに対しては特に問題としていないと私は考える。しかし、バカ親に対してはやや辛辣な言葉を残している。

わが子のための数千円、数百円を、なぜとっておくことができなのだろう。アルバイト代までも奪い取り、パチンコに注ぎ込む親もいる。こちらが見かねて親としてのあり方をやんわりと問い質すと、途端に自分の不幸話へと話題をすり替える。子供など産むつもりじゃなかった。子どもさえいなければ、もつとらくな暮らしができたのに。そんな、十年前の事情などこちらの知ったことではない。死んでしまえ、と喉元まで出かけた言葉を飲み込み、世の中にはこういう生き物が蔓延しているのだ、と自分に言い聞かせてあきらめる。

『母性』(五一頁)

私は、清佳が言う親の特徴は、近年学校においてよく見られる親の特徴なのではないかと考える。この特徴は湊が教師をしていた経験により生まれたのではないか。

また、当時から今も続く問題として生活保護費の受給問題についても作品中に出てくる。

電話口で声を張り上げることができると、普通に働けるからだを持ちながら、生活保護費を受け取り、その大半をパチンコなどのギャンブルに注ぎ込む。そして、月末になり金が底をついてくると、学校に泣きついたり、脅しをかけたりののだ。

『母性』(五一頁)

この生活保護費に関しては本作品が出版された当時に最大値となっているという統計が
取れている。本作品の初出は二〇一二年一〇月であり、清佳がこの章で語っている時点は前
章で考察したように二〇一一年のどこかである。したがって、この条件に基づいて日本にお
いての生活保護費受給の統計を考える。国の社会保障関係費の推移をみると二〇一一年にお
いて、生活保護費のしめる値は二六・〇六五億円であり、国の社会保障関係費において生活
保護費が占める割合は九・一%となっている。また、二〇一二年にはそれよりもさらに増え、
生活保護費は二八・三一九億円にもなり、社会保障関係費における割合は一〇・七%と
いう今までで最高額の予算が算出されていることがわかった(16)。

このことから湊は、その時期に起きていた時事的な社会的問題も小説の中に組み込んでい
ることがわかる。このことによって、読者は自分の身の周りに起こっている時事的な事件な
どと絡め合わせて本作品を読むことができる。ここが本作品を読む上でのおもしろさの一つ
であるといえるのではないだろうか。

おわりに

母性は本能ではない。このことがこの作品からよく感じ取れるのではないかと思う。この
ように湊のようなメジャー作家が母性は本能でないことを小説として形に残してくれるこ
とによって、「母性本能」のような当たり前のようになっていく世間一般の認識に、多くの
人々が疑問をもつきっかけをくれるのではないかと思う。また、母性という神話に母親たち
は苦しめられている、そんなことも本作品から読み取れるのではないかと思う。湊の作品は
社会的な視点に立っている作品が多いとは以前から感じていたが、この作品はその中でもそ
の側面が際立っていると思う。母性や母と娘の関係を作者自身ごとく掘り下げて、描い
たのだと感じる場面が数多くあった。そんな湊の大作である『母性』で論文を書いたことを
嬉しく思う。

(註)

- (1) 倉本さおり 「読むたびに反転する景色の中で問われ続ける『それ』の是非」 『週刊金曜日』 20巻第921号 二〇一二年(平成二四年)年一月 46頁
- (2) 湊かなえ 『告白』 二〇〇八(平成二〇)年 双葉社
- (3) 大西赤人 「あるべき『志』の決定的な欠落——湊かなえ著『告白』について」 『社会評論』 第157号 二〇〇九(平成二二年)年 82頁
- (4) 大西赤人 「偏見を拡散させる原作と映画の結構を紛す——『告白』中島哲也監督・脚本湊かなえ原作について」 『社会評論』 162巻 二〇一〇(平成二二年)年 174頁
- (5) 飯島美沙都 「変化する視点、うつろう真実——湊かなえ『告白』論」 二〇一二年(平成二四年)年
- (6) 渡邊章夫 「児童文学の立場から——現代文化に於ける『童心』の行方——」 『愛知大学短期大学部研究論集』 35巻 二〇一二年(平成二四年)年 120頁
- (7) 湊かなえ 『贖罪』 東京創元社 二〇〇九(平成二二年)年六月
- (8) 湊かなえ 社納葉子 「Interview 湊かなえ 「母性とは何かを改めて考え直してみたかった」」 『文蔵』 92巻 二〇一三年(平成二五年)年六月 15頁
- (9) 芹沢俊介 『母という暴力』 春秋社 二〇〇五年(平成一七年)年六月 20〜21頁
- (10) 芹沢俊介 『母という暴力』 春秋社 二〇〇五年(平成一七年)年六月 114〜115頁
- (11) 田間泰子 『母性愛という制度』 勁草書房 二〇〇一年(平成一三年)年八月 7頁
- (12) 江原由美子 『母性』 岩波書店 二〇〇九(平成二二年)年四月 2頁
- (13) 湊かなえ 社納葉子 「Interview 湊かなえ 「母性とは何かを改めて考え直してみたかった」」 『文蔵』 92巻 二〇一三年(平成二五年)年六月 18頁
- (14) 湊かなえ 『Nのために』 双葉社 二〇一四年(平成二六年)年九月 252頁
- (15) 湊かなえ 『Nのために』 双葉社 二〇一四年(平成二六年)年九月 223頁
- (16) 「国立社会保障・人口問題研究所 第二節 社会保障給付及び再配分効果 第一五

表 社会保障関係費の推移」

(<http://www.ipss.go.jp/ssj-db/ssj-db-top.asp>) 二〇一四年二月五日閲覧

参考文献

・斎藤環 『母は娘の人生を支配する』 日本放送出版協会 二〇〇八(平成二〇)年五月